

心理臨床家のアイデンティティ発達に関する 研究の動向と展望

眞鍋 一水・岡本 祐子
(2016年10月6日受理)

Trends and Considerations in Identity Development among Clinical Psychologists

Issui Manabe and Yuko Okamoto

Abstract: The current study reviewed the theories and models of identity development among clinical psychologists. Clinical psychologists commonly experience identity diffusion or confusion in their work, because of an absence of clear goals and approaches for providing support to clients. We propose that establishing a professional identity formation model for clinical psychologists could aid the development of methods for preventing identity diffusion. Research in our lab has revealed three main findings. First, clinical psychologists commonly experience identity diffusion in their work, but can recover from identity diffusion by relating to other clinical psychologists and people around them. Second, the cyclic model is useful in the development of professional identity formation models. Third, clients influence the identity development of clinical psychologists. Future research is needed to examine the specific relationships between clinical psychologists and people around them to find ways of preventing identity diffusion. There is also a need to investigate relationships between clinical psychologists and their clients, to understand the dynamics of therapeutic situations.

Key words: Clinical psychologist, Professional identity, Identity diffusion, Relationships, Identity development

キーワード：心理臨床家、専門家アイデンティティ、アイデンティティ拡散、他者との関係性、アイデンティティ発達

1. はじめに

臨床心理学的知見を用いて対人援助にあたる心理臨床家の呼称については、本邦では「臨床心理士」や「カウンセラー」という言葉が一般的である。一方で海外では国ごとに多岐に渡っている。共通する呼称として「カウンセラー」や「セラピスト」が挙げられる。「カウンセリング」は一般的に幅広い援助を言い、精神保健福祉士や看護師、ボランティアが「カウンセリング」を行うことが多い。一方「サイコセラピー」はある学派の理論や訓練を重視し、訓練を受けた者が行う点が異なっている（下山，2002）。本邦においては、公益財団法人日本臨床心理士資格認定協会が認定する「臨

床心理士」の資格を持つ者は「臨床心理士」と名乗れるが、同時に「心理臨床家」でもあり、「カウンセラー」でも「セラピスト」でもありうる。呼称が整理されていないこのような状況は、心理臨床家の多様性や専門性の曖昧さを示している一例と言える。臨床心理士の資格問題や経済的困難さなど、心理臨床家を囲む環境は安定せず揺れ動いている。そのような状況の中でも臨床行為を提供していくために、心理臨床家の業務面・個人面の改善を行っていく必要性が指摘されている（金沢・岩壁，2006）。心理臨床家が成長し機能していく為に、心理臨床家自身への援助やサポートも必要と考えられている（田所・小嶋・松本，2004；田所・松本・小嶋，2005）。本邦でも心理臨床家の成長やサポー

トを行うため、心理臨床家の発達や熟達の過程について明らかにして行く必要があると指摘されている（岩井, 2007；新保, 2000）。海外ではそのような研究は行われているが、本邦ではまだ数少ない。心理臨床家のアイデンティティ発達を明らかにすることで、養成する側として心理臨床家が成長していくために効果的な支援体制を検討できたり、心理臨床家自身が成長・発達していくために欠かせない視点を持つことができる等の示唆が得られると考えられる。

本研究では海外や本邦での心理臨床家のアイデンティティ発達研究をレビューし、今後の研究課題について考察することを目的とする。なお、本論では「心理臨床家等」に臨床心理士やカウンセラーを含む。

2. 専門家アイデンティティ

鎌・山本・宮下 (1984/1995) や鎌・宮下・岡本 (1995a, 1995b, 1997), 鎌・岡本・宮下 (2002) は、主に海外のアイデンティティ研究をレビューする中で心理臨床家のアイデンティティを扱っている。取り上げられている調査研究を概観すると、①心理臨床家の専門性を明らかにする研究 (Schoen, 1989 など)、②心理臨床家の職業的アイデンティティ尺度と他の変数との関係を明らかにする研究 (Gilbert, 1985 など) に大別された。

本邦でも心理臨床家の発達についていくつか研究がある。森田・岩井・松井・直井 (2008) は大学院生を対象に自身のアイデンティティについて記述式の調査を行い結果を報告している。「自分自身のあり方」や「クライアントに対する姿勢」、「専門職としてのあり方」が挙げられており、博士前期課程と後期課程での比較検討が行われた。また、元木・安田・久田 (2014) は臨床心理士の「専門職アイデンティティ尺度」を開発した。「適正と能力」、「社会貢献」、「やりがいと充実感」の3因子が得られた。上村・小海・井出・箕浦・高下・田淵・須佐 (2013) は、「日本語版スーパーヴァイジー職業的発達尺度」を作成し臨床心理士に実施した。訓練歴が長いほど得点が高くなることが明らかになっている。このように、心理臨床家のアイデンティティを量的に調査する試みがいくつか認められる。

一方で、心理臨床家アイデンティティはどのように形成・成長するのかを明らかにするプロセス研究も重要である。Stoltenberg & Delworth (1987) による“Supervising Counselors and Therapists: A Developmental Approach”やSkovholt & Ronnestad (1992) による“The Evolving Professional Self: Stages and Themes in Therapist and Counselor

Development”, “The Journey of the Counselor and Therapist (Ronnestad & Skovholt, 2003)”は本邦でも知られた書である。それぞれカウンセラーやセラピストの専門的発達段階を調査・検討した研究である。カウンセラー、セラピストの専門的発達を扱った書として広く紹介されている (金沢, 1998 など)。以下では、それ以外の心理臨床家アイデンティティの発達・成長に関する論文を展望しその課題について論じる。

海外の文献を収集するにあたっては、EBSCO (MEDLINE, Psycho INFO, Psycho ARTICLE) を用いて、“Therapist”あるいは“Counselor”, “Psychotherapist”, “Clinical Psychologist”, “LPC(Licensed Professional Counselor)”, “NCC (National Certified Counselor)”などの呼称と“Identity formation”あるいは“Identity development”, “Professional identity development”, “Professional identity formation”のアイデンティティ発達を表す語をタイトル又は抄録に含めた査読付論文を検索した。その結果906件の論文が抽出された (重複を含む)。概観すると、MCC (Multi Cultural Competencies: 多文化に対応したカウンセリング能力)、フェミニスト・アイデンティティ、セクシャル・マイノリティのアイデンティティ、民族アイデンティティ、クライアントのアイデンティティに関する研究が多かった。その中から心理臨床家のアイデンティティ発達プロセスや要因についての研究を抽出した。また、検索では抽出されなかったが循環のプロセスを生成した点で重要な研究と考えられる Sawatzky, Jevne & Clark (1994) の査読付き論文も追加した。

国内の文献を収集するにあたっては、CiNii を用いて、「心理臨床家」や「臨床心理士」、「カウンセラー」、「セラピスト」などの呼称と「アイデンティティ」をタイトル又は抄録に含めた査読付・無査読論文を抽出した。その結果51件の論文が抽出された (重複を含む)。概観すると心理臨床家等についての論考、他職種についての調査、クライアントの事例報告、心理臨床家等についての調査研究に分けられた。心理臨床家等についての調査研究から、アイデンティティ発達プロセスに関する研究で査読付き論文のみを抽出した。その結果近藤・長屋 (2016) の論文のみが得られた。また、上の検索では抽出されなかったが、上手 (2014) の質的調査、岡本 (2007) や坂本 (2012)、中島・富澤・片岡・荒井 (2015)、割澤 (2016) の研究も含めることとした。

これらの研究を、アイデンティティ発達を検討する時期と分野から3つに分類した。その結果、訓練中、訓練後かつ特定領域、訓練後かつ生涯発達の3つに分類された。以下ではそれぞれ分類ごとに研究を概観し

て考察する。

3. 訓練中のアイデンティティ発達

Auxier, Hughes & Kline (2003) は訓練中のカウンセラーを対象に面接調査を行い、修士課程の学生のアイデンティティ発達を調査した。その結果、以下の3つが互いに相互作用し循環する「循環的アイデンティティ形成プロセス」が生成された。①概念的学習：書籍などから学術的な内容を学んでいく。②経験的学習：カウンセリング技術を体験的に学ぶクラスが始まる。概念的学習から経験的学習への変化は新しい感情や行動の気づき、対人行動の変化を必要とするためカウンセラーは戸惑いもがく。③外的評価 (External evaluation)：カウンセラーは共に学ぶ仲間やスーパーバイザー (以下：SVR)、教員、そしてクライアントから、カウンセラー自身やカウンセリングについての情報やフィードバックを受ける。外的評価や肯定を受けることで、不安を減じるなどの効果が得られることが明らかにされた。

Gibson, Dollarhide & Moss (2010) は訓練中のカウンセラーに質的調査を行った。専門家アイデンティティの発達プロセスは「対人間」と「個人内」のどちらでも生じると考え、初心カウンセラーの専門家アイデンティティ発達のプロセスを生成した。発達過程では、a.「カウンセリングの定義」、b.「専門的発達への責任」、c.「組織で働くアイデンティティへの変化」という3つの変化課題 (Transformational tasks) が変化していくことが明らかになった。それぞれ、a. 専門家の意見の反映から内在化された定義へ、b. 専門家による教育への依存から個人内の責任へ、c. 個人的な技術の習得から専門家集団での組織レベルでのアイデンティティの統合へ、という変化が認められた。この変化の過程には3段階のプロセスが認められた。まず、同期や教員、スーパーヴィジョン (以下：SV) などによる「外部からの肯定 (External validation)」の段階、次に「コースワークや経験、そしてコミットメント」の段階、最後に、外部からの肯定に頼らず自分自身を認めることができる「自己肯定 (Self validation)」の段階であった。

Nelson & Jackson(2003) は訓練中のヒスパニック系の学生に専門家アイデンティティの発達について面接調査を行った。グラウンデッド・セオリー法を用いて分析し、アイデンティティ発達に際してのテーマを7つ生成した。①知識：知識を得ることは、自分自身を振り返り考えることに繋がっていた。②個人的成長：他者をいかに援助できるかだけでなく、自分自身につ

いての洞察も多く得られていた。③経験的学習：グループワークやロールプレイ、インターンシップなどの体験は、学生の確信を強め、学びを応用することを助け、経験のない世界に目を向ける機会となっていた。④関係性 (Relationships)：共に学ぶ姿勢を持っている教員や、情緒的なサポートとして同期、励ましてくれる家族、SVRなどが重要な役割を担っていた。⑤達成感：学位をとるなどカウンセリング専門家になる第一段階を達成したことへの満足感が語られた。⑥コスト：大学院で教育を受けるコストは重要な問題であった。金銭的、情緒的なコストが考慮されていた。⑦カウンセリング専門家の認知：家族や友人などのカウンセリングへの認知は学生から見るとズレていた。学生自身は肯定的な視点を持っていた。これら7つのテーマは発達に際してのアイデンティティ要因 (Identity factors) として専門家アイデンティティの発達に影響を与えていると考えられた。

Chang (2011) は訓練中のカウンセラーにインタビュー調査を行い、カウンセラーの発達に際しての4つの時期を得た。①伏線 (Fore shadowing)：この期では書籍などから手がかりを得る。また、カウンセラーという職業選択と、個人的な資質や自分自身の体験とを結びつけて理解している。②幕開け (Opening chapters)：興奮や期待と共に養成課程が始まる期である。この期では新しい技術や理論を学ぶが、質・量的に圧倒されるため学びの量を調整していく必要に迫られる。また、技術などを身につけていくことを求められるため、カウンセラーになるにあたっての疑問や不安、恥の感覚や混乱などの不一致が生じる時期である。理論と実践との間でつなぐの無さを経験することも多い。この期に同期 (peers) は不一致や不安を解消していくために重要な存在である。自分の経験していることに不安はあるが、同期たちの経験を見ながら、互いに支え合っていくことができる。③大団円・演習 (Denouement・Practicum)：学んだ知識や技術を統合していくことが求められる。実習にあたって高い期待を抱くが、同時に自らの実力への不安や能力への疑問を抱くこともある。困難な状況にあるクライアントに圧倒されることもあり、そういった時には「完全にお手上げ」状態に陥ることになる。カウンセラーという職への適正を疑うこともあるが、同期に話をするなど、サポーターを動員することで乗り越えることができる。また、この期にはクライアントとの体験が学びの上で重要かつ忘れられないものになる。クライアントのモチベーションや決断力、強さ、レジリエンスに触れて揺り動かされることもある。クライアントがストレスフルな状況にあるにもかかわらず乗り越え

ていく経験から、カウンセラーが価値ある学びを得ることも多い。④初心専門家 (New profession) : 必要な課程を終え、得た技術によって確信を抱いている期である。カウンセラーの一員として自分の位置を得た感覚や、技術の習得に対して深い満足感を得ている。また、カウンセラー養成教育を受けた結果、自分自身の行動や感情、対人行動、家族関係に変化が生じることも多い。以前よりも適応的、情熱的、感覚的になったとか、根付くことができたという報告もあった。

割澤 (2016) は臨床心理士指定大学院を卒業した者を対象に質的調査を行い、初学者の学習プロセスを生成した。学習プロセスは「知識や助言に依拠する学び」と「自身の感覚や判断に依拠する学び」を両輪として行きつ戻りつすることが明らかにされた。プロセスの進行状況の個人差から、協力者を4つのグループ (以下: G.) に分類している。G. I. は「捉えどころのわからなさ」や自分の感覚や判断を信頼できない思いを抱きながら、「知識や助言に依拠する学び」に特化した学習を進める。G. II. は、G. I. と同様の思いを抱きながら、「知識や助言に依拠する学び」と「自身の感覚や判断に依拠する学び」を両輪とした学習を進める。G. III. は、G. I.・II. のような揺れ動きを体験しつつ、他者からの肯定的なフィードバックを受けることで自分の実感を根拠として信頼できたり、「自分は自分として (クライアントと) 会うしかない」と覚悟をもつ。G. IV. は、G. III. に加えて、クライアントと自分自身の間で生じる相互作用を活用する視点や、自分の役割や位置づけを俯瞰的に捉えられるようになる。

以上の研究を展望すると、心理臨床家になるための訓練過程では、クライアントへの援助にあたって自分の力や感覚が信じられなくなるような混乱状態に陥ることが示された。心理臨床家アイデンティティを形成する中でのアイデンティティ拡散状態とも考えられる。そしてこの拡散状態から回復していくには、支え合える仲間や教員、SVR の存在が情緒的支えとして重要になっていた。また、今の自分のできているところ、できていないところを評価され、具体的にわかっていくことも、拡散状態からの回復に寄与していた。他者からの評価を受け取ることで最終的には自分自身を自分自身で評価し、認めることができるようになっていくことが示唆された。その結果としてSVRや教員に頼らずに、自分自身としてクライアントの援助に当たることができるようになると思われる。

4. 特定領域におけるアイデンティティ発達

Brott & Myers (1999) は、カウンセラーのアイデンティティ発達は職業役割や意思決定、専門家としての発達を通してなされると考えた。その上で専門家アイデンティティの発達は結果よりもプロセスだと考え、質的研究法を用いてスクールカウンセラー (以下SC) の発達モデルを調査した。その結果、カウンセラーにとって専門的役割を遂行するための個人的ガイドラインの必要性が基本的な課題となっており、その個人的ガイドラインはSCとしての自己概念に拠っていた。SCとしての役割実践にあたっては複数の影響を受けており、その影響を“混ぜ合わせる (Blend)”ための方法を見つけ出していた。複数の影響とは「経験」と「カウンセラー」、「本質的要素」の3つの条件であった。「経験」とは勤続年数や知識量、「カウンセラー」は他のカウンセラーの存在と時間的制限・責任との関係、「本質的要素」は学生のニーズや発達課題、管理職やSVRから与えられた課題から定義されていた。“混ぜ合わせ”るプロセスとは、以下のようなものであった。①構造化:「立場の明確化」によって情報を発信したり、「評価」を用いて組織を見立てるなどとする。②相互作用:「管理」を用いて判断を下し、「応答」を用いて複数の意見の仲介をする。③区別:「主張」を用いて他者を取りまとめ、「説明」で専門的な責任を主張する。④進化:「維持」の過程では仕事についてさらに学んだり、「撚り合せ (Intertwining)」では専門性の実際を振り返ったり実躬ぎ (さねはぎ: 木工における板の接合方法の1つ) のように協働を試みる。これらの“混ぜ合わせ”のプロセスとしてSCの役割が実践されていた。

Cinamon & Hellman (2004) はSCの専門家発達の段階 (Hellman, 1999) にそって、各段階に特有の要因を調査した。Hellman (1999) の発達段階は7段階だが、Cinamon & Hellman (2004) の調査では4つの段階から理解した。①探索段階: 過剰な負担感や家庭と職場での役割の葛藤が語られた。また、教員や学校心理士との協働が心がけられていた。②維持段階: カウンセリングを仕事や役割と定義するのみならず、専門性の幅広い視点が役立てられていた。以前の段階では構造化されたプログラムに頼っていたことに対し、この段階ではクライアントのニーズに合わせてプログラムを組み上げていく専門的能力が発揮されていた。③専門化の段階: 専門職としてのスクールカウンセリングを誇りを持って定義し、専門的能力に確実な自信を持っていた。同僚や教員、学校心理士との協働が働く上で欠かせない要因となっていた。④身を引く

段階：この段階は働き方やカウンセリングの定義、ジレンマなどから特徴付けられたのではなかった。バーンアウトを予期して専門家生活から身を引くことを望んでいたSCが、この段階に当たると考えられた。

坂本（2012）は12名の学生相談カウンセラーのコラムを分析し、学生相談カウンセラーの職業的発達モデルを生成した。①学生相談に従事し始めて間もない時期の「参入期」、②参入して数年が経過し、自分なりの学生相談のスタイルを模索する時期の「探索期」、③探索期までの経験を統合しさらに発達を遂げ、学生相談カウンセラーの職能を獲得する「確立期」の3段階から成っている。3段階を「個人-心理臨床家としての発達」と「組織人-大学教員としての発達」という2軸が継続的に相互作用しながら、「心理臨床ができる教職員」という個性化へ向かうプロセスが生じていた。さらに、このプロセスを支え促進させる要因は、学内外のサポーターや個人のモチベーション、人生経験を臨床に体験的に統合しようとする視点であった。

中島・富澤・片岡・荒井（2015）は、新人期の学生相談カウンセラーの成長プロセスを生成した。①無我夢中な世界への没入：学生相談という働き方のわからなさや、ここで働いていいのかという自問自答、「申し訳ない」という感覚を伴う自分自身への絶望など、無力感や挫折体験も含まれる。②諦念体験：学生相談という働き方がわかってくと同時に、職業にとどまらず個人の成長プロセスにまで及ぶような深い体験に出会う。カウンセラーとクライアントの人生を重ねて相似形のように理解したり、自己の限界を認めるといった体験である。③相対化された自己へのコミット：初期段階で見られた不安や迷いは低減され、他のカウンセラーと比較せず自分とクライアントの関係に焦点をあてるようになり、他者と比較しての良し悪しは重要ではなくなる。④以上のプロセスを促進する動因が認められた。クライアントである学生が変容していくことで希望や自信を持ったり、あるいは逆に意欲や自信を喪失することもあった。同僚からの承認や、理論や技術を学ぶこと、勤務形態や待遇などが成長を促進・停滞させていた。⑤以上のプロセスと動因は、個人の成長プロセスである自己の捉え直しの内部に位置していた。自己実現や人間関係の捉え直しが含まれており、ライフイベントや他領域での経験からも影響を受けていた。⑥これらの職業上・個人の成長は相互作用として調和化され、職業的自己のみならず全人格的な自己の中核に触れる体験にもつながっていた。

Dollarhide, Gibson & Moss（2013）は、カウンセラー教育を将来的に担う博士課程の大学院生を対象に専門家アイデンティティの変化課題を調べた。その結果、

a. 「責任の引き受け」、b. 「適格性の発展」、c. 「多様なアイデンティティの統合（Integration of multiple identity）」の3つの変化課題が得られた。それぞれ a. 他の専門家の引用から新しい知識の創造、訓練カウンセラーである責任感の内化へ、b. 修士課程での成功からカウンセラー教育家としての成功、自己や同期からの評価へ、c. カウンセラーであることから初心カウンセラー教育者へ、という変化が認められた。その変化過程には3つの段階が含まれていた。まずは同期や教員、SV等による「外部からの肯定（External validation）」の段階、次に教育やSV、研究などの「経験」の段階、そして外部と内部からの肯定を統合した「自己肯定（Self-validation）」の段階であった。

以上の研究には、3つの立場についての研究が認められた。第一にSC領域では、学校心理士や教員など他職種との協働が重要な課題となっていた。発達段階に合わせて、協働の重要性が増していった。また、クライアントに合わせて柔軟に自分の能力を発揮する能力も発達過程で得られていた。第二に学生相談領域では、当初は新しい現場で働き方がわからないこともあるが、時間をかけて自分なりのスタイルや働き方を身につけることが重要な課題となっていた。その際には同僚が支えてくれることで仕事を続けられるように、同僚の支えは重要な要因になっていた。また、クライアントの存在が働いていく意欲の源にもなり、逆に自信を喪失する理由にもなっていた。このように、他者の存在は訓練中から引き続いて重要な要因となっていた。仲間や教員、SVRの重要性は訓練過程と変わらないが、クライアントの存在の重要性が増していった。これらは他の領域や生涯発達上も重要な要因であると考えられる。一般性を検討していくことが今後の課題と考えられる。なお第三のカウンセラー教育家の領域では、カウンセラーやカウンセラー教育者など、多様なアイデンティティの統合が課題であることが特徴的であった。この領域はまだ研究が少なく、今後のさらなる検討が待たれる。

5. 訓練後のアイデンティティの生涯発達

Sawatzky, Jevne, Clark（1994）は、どのような経験がカウンセラーとしての有能感の発達に寄与するかを研究した。その結果4つのテーマを含んだ循環的な発達モデルが得られ、「力づけられていく（Becoming empowered）プロセス」と名付けられた。①不協和の経験：トレーニングを終えて自分のスキルや知識、実践能力を感じられる環境を離れ、不協和が生じる環

境（現場）に自ら入っていく。現場では自分が十分に知らないこと、スキルがないことを自覚する。また、感情的な混乱を経験する時期でもある。恐れや不満足感、不安、混乱を頻繁に経験する。②不協和への応答：現在生じている以上のリスクから身を引いたり、能力や限界を設定する。具体的には手厳しく混乱させられるようなSVではなく、より安全なSVを求めたり、自分には何ができるかという限界を定める。また、新しい技術や情報、経験を習得する。自己分析や日記、同僚との対話を通した自己の振り返りと態度の変化も生じる。③SVへの関与：SVでの関係性は不協和を扱う上で重要な焦点となっており、SVで安全感を感じられることを求めている。SVの雰囲気やアセスメントし、SVRとのプロセスや関係性をモデルとして用いたり肯定感を感じていく。SVRは取りうる手段を提案してサポートし、この安全な雰囲気の中でケースの難しさに対して援護があることをカウンセラーは感じられる。最終的には自分が自分自身のSVRになっていく。④力づけられた感覚（Feeling empowered）：大きく2つ、1.視点の変化、2.有能感が高まる体験が語られた。1.視点の変化では、自己への信頼が増し、新たな挑戦を可能にするなどの変化が起こる。専門家としての自己と個人的な自己の境界が明確になり、相互作用も生じる。ケースでは他の資源をアセスメントすることへの開放性が生まれ、自らの面接過程を振り返る能力も増していく。2.有能感が高まる体験では、新しい技術を得たことへの満足感や自律性の感覚、専門職としての所属感を抱き、同僚性を楽しむようになっていく。以上の「力づけられていく」プロセスの経験は、同僚やクライアントとの教えと学びのプロセスの経験であり、これは相互作用のかつ終わりのプロセスとしてみることができると考察された。

岡本（2007）はSkovholtらの研究を参考に質問項目を作成し、質的調査から心理臨床家の職業的発達プロセスを生成した。職業的発達を「心理援助職としての自己が確立し、確立後も変化を続ける成長過程」と理解し、その中で専門家同一性が獲得されると考えた。職業的発達に関する要因を明らかにするため、仕事上で生じる困難や問題とそれらが克服された要因について考察した。困難や問題には職場環境と人間関係など職業人として誰しもがもつ問題と、心理臨床家としての揺らぎやクライアントとの関係など心理職固有の問題が挙げられた。それらの克服には、外的要因に職場の人間関係や人生経験、理論的志向性や研修、内的要因にカウンセラー自身の成長が挙げられた。

Alves & Gazzola (2011) は専門家アイデンティティ

を成長させていくための重要な要因を明らかにするため、修士課程の大学院生にインタビュー調査を行った。その結果、カウンセラーの専門的アイデンティティの発達に影響する鍵要因が8つ得られた。①個人のアイデンティティと専門家アイデンティティは結びついている：個人的な人生経験が仕事のやり方を導いたり、専門職に就いた後も個人のアイデンティティも発達を続ける。②職業体験が専門家アイデンティティに強く影響する：臨床経験が、養成過程での学びや資格、学会の会員であることよりも重視されていた。③カウンセラーの専門家アイデンティティはその役割によって定義される：専門家アイデンティティを自分の役割や責任、ありのままの自分といった言葉で説明していた。④カウンセラーは自主学習やセルフ・ケア、専門的発達に重きを置いている：カウンセラーに関係する文献に目を通したり学会に参加し、セルフ・ケアも実践し、そして専門的経験を同僚と共有することは、価値ある体験である。⑤専門家集団に属していることは専門家アイデンティティにとって重要である：学会に参加したりSVを受けたり、同僚と情報を共有するなど、カウンセラー集団に属していることは他の専門家と出会う機会になっていた。⑥専門家アイデンティティは文脈と一体である：働く領域によって求められる仕事内容や取りうる枠構造、訪れるクライアントの主訴も異なっている。⑦専門家アイデンティティは時間をかけて発達する：専門家アイデンティティは時間が経つほど確かになっていくものであり、固定概念ではなく、時間の中で積み重なった経験や要因が影響している。⑧カウンセラーであることに対するポジティブな感情：働く以前には考えられなかったような特有の利益として、クライアントを援助するよこびや経済的満足感も語られた。

Moss, Gibson & Dollard (2014) は臨床経験が1年～20年超のカウンセラーを対象に調査を行い、専門家発達の節目を明らかにした。a.「働くことへの態度」、b.「働くためのエネルギー」、c.「個人の統合」という3つの変化課題が明らかになった。それぞれ、a.理想主義から現実主義へ、b.バーンアウトから活性化へ、c.区分化から一体化へ、という変化が認められた。その変化過程では3つの段階が経験されていた。最初は経験を積んだ導き手やクライアントによる「外的肯定（External validation）」、次にクライアントとの作業や学び続けることによる「経験と専門的発達」、最後は現実的感覚や活性化を得たり仕事と人生を一体化した「自己肯定（Self-validation）」の段階であった。

上手（2014）は、岡本（2014）がプロフェッションという観点から芸術家や心理臨床家を対象に質的研究

を行った一連の研究の中で、心理臨床家のプロフェッション生成プロセスを生成した。まず専門世界に入る前の段階では、幼児期の体験やパーソナリティをもとに個人的資質が形成される。ここには専門世界への関心も含まれており、専門世界への出会いへと至る。そして理論と概念の知の習得と実践が始まる。実践では個人的資質が「まざまざ」と現れ、改めて個人的資質を発見し専門家としてのあり方との間で吟味され、次第に活用されるようになる。最終的には理論・概念的な知と個人的資質、実践からの知が統合された状態が心理臨床家の専門性の成熟であると考察されている。

Mateo & Reyes (2015) はフィリピンのカウンセラーの発達を調査し、4つの段階と発達テーマを抽出した。①探索段階：不安や緊張、自信に欠ける段階である。面接では構造化もシステム化もされていない手法をとりがちである。学習や同期、SVR、個人的な経験が専門家として成長していく要因となる。②身につける段階：学際的な学びや専門家教育に触れる時期である。この時期には2つの大きな目標があり、1つはカウンセリングの能力 (Competence) を高めていくこと、もう1つは学位や資格を取得するなどカウンセラーとして働くために必要な要件を満たしていくことである。この段階は自分への疑念から確信へと移っていく段階でもある。実践で求められることに合わせて養成過程での学びを応用し、学びを構造化しようと試みる。この段階では教員や同期、理論、ワークショップなどが専門家として成長していくために欠かせない要因となる。③ゆとりある実践段階：以上の過程で自分が新しいカウンセラーであると信じ、またそのことを主張するに値する資格を得たことで到達できる段階である。求められた要件を満たしているという確信が自信を育む。個人的な成長と専門職としての発達が、専門職として進歩しているという感覚の力強い指標になる。また、クライアントからのフィードバックが成長にとって重要な要因となる。カウンセラーの評価はフォーマルには行われず、インフォーマルな評価に頼らざるを得ない。臨床実践を修正すべきかどうかをインフォーマルな評価から考えるしかないが、その際にクライアントの影響は大きい。また、クライアントからのポジティブなフィードバックがカウンセラーという専門職に留まる動機や自信にもつながる。④刷新段階：この段階ではすでに公的な立場からは退いていることも多い。個人の人生経験や専門家集団が、成長していく上で主な要因となる。

近藤・長屋 (2016) は心理臨床家の専門職アイデンティティが、生涯を通して他者との関係性 (Relationships) の中で発達していくことを明らかに

した。①職場：他職種の視点を学んだり、関係を構築することで互いに支え合える存在になる。一方で他スタッフとの連携の困難さも語られていた。②ケース：クライアントの成長が支えになったり、クライアントに育てていただいたという意識が生まれる。一方で関わることへの自信のなさも初学者から熟練者を通して語られた。③SV：初学者から中堅者の間は指導が主であることに対し、中堅者から熟練者ではSVRを取り入れ内在化していくなどのSVの変化が語られた。この過程ではSVが個別性を増していったり、ホールディングと安心感が得られることが語られた。

以上を展望すると、段階的なモデルがほとんどであるが、循環的なモデルも1つ認められた。段階的な発達の中をどのように進んでいくか、循環的でミクロなモデルの検討は今後の課題と考えられる。また、訓練中のアイデンティティ発達と共通して、訓練後も自分の臨床実践に自信を失うアイデンティティ拡散とも言える状態に陥ることが示された。その際には同僚などの情緒的支えはもちろん、SVRによる抱えも重要であることが示唆された。臨床家自身が安全感を感じることができるSVに身を置くことで、クライアントと面接を続けていくことができることが示唆された。また、クライアントから学んだり、クライアントとの関係が成長の要因になっていることも明らかになった。この結果は訓練中のアイデンティティ発達においては少数だったが、訓練後のアイデンティティ発達では広く認められ、欠かせない要因であることが明らかになった。クライアントとの事例や失敗例から学んでいく姿勢の重要性を岩壁 (2007) や川上 (1993)、村井・岩壁・杉岡 (2013) は指摘している。また、事例から自分自身を振り返り学ぶものがあることは、鈴木 (2013) や吉沢 (2007) にも指摘されている。心理臨床家のアイデンティティ発達に際してクライアントが重要な意味を果たしていることは明らかだが、どのような意味や役割をもっているのかを詳細に検討していくことは、引き続き今後の課題と考えられる。

6. 今後の展望と課題

海外と本邦の心理臨床家アイデンティティ発達理論を概観すると、心理臨床家の訓練過程においても訓練後においても、自分の臨床に対して自信を失い混乱する心理臨床家アイデンティティの拡散と言える状態が避けられないことが示唆された。このようなアイデンティティ拡散に対して、同僚や同期、SVRなど周囲の他者からの情緒的な支えや現状評価を受ける体験を得て、拡散から回復できることが示唆された。アイデ

ンティティ発達は、関係性の中で進んでいくことが注目されている(杉村, 2001; 近藤・長屋, 2016など)。心理臨床家をとりまく関係性の中にサポートや現状評価の要素が含まれており、その関係性の中でアイデンティティを発達させていくと考えられる。他者との関係性に焦点を当てた心理臨床家アイデンティティの発達プロセス研究が今後必要であろう。その際には、循環的なモデルの生成が有益であると考えられる。

成長のプロセスではクライアントの存在も大きな意味を持つことが示唆された。訓練初期よりも訓練を終えた後の過程でより重視されていた。具体的にはクライアントから学びを得たり、モチベーションにつながったり、現状評価を受けることができるなどであった。クライアントとの体験が心理臨床家のアイデンティティ発達プロセスに影響を与えていることを意識し、クライアントとの関係性やクライアントの存在に意識を向けていくことが心理臨床家の成長を支えたと考えられる。クライアントとの関係性からどのように心理臨床家アイデンティティが発達していくかを詳細に検討することは今後の課題である。また、クライアントとの関係性において、逆転移を通したセラピストの成長がクライアントへの理解や治療過程の進展をもたらしたという報告(富樫・寺田, 2011)があるように、クライアントとの関係性を検討していくことは心理療法的にも意義があると考えられる。

【引用文献】

- Alves, S. & Gazzola, N. (2011). Professional identity: A qualitative inquiry of experienced counsellors. *Canadian Journal of Counselling and Psychotherapy*, 45, 189-207.
- Auxier, C. R., Hughes, F. R. & Kline, W. B. (2003). Identity development in counselors-in-training. *Counselor Education & Supervision*, 43, 25-38.
- Brott, P. E. & Myers, J. E. (1999). Development of professional school counselor identity: A grounded theory. *Professional School Counseling*, 2, 339-348.
- Chang, J. (2011). An interpretative account of counsellor development. *Canadian Journal of Counselling and Psychotherapy*, 45, 406-428.
- Cinamon, R. G. & Hellman, S. (2004). Career development stages of Israeli school counsellors. *British Journal of Guidance & Counselling*, 32, 39-55.
- Dollarhide, C. T., Gibson, D. M. & Moss, J. M. (2013). Professional identity development of counselor education doctoral students. *Counselor Education & Supervision*, 52, 137-150.
- Gibson, D. M., Dollarhide, C. T. & Moss, J. M. (2010). Professional identity development: A grounded theory of transformational tasks of new counselors. *Counselor Education & Supervision*, 50, 21-38.
- Gilbert, D. (1985). The development of professional identity of psychotherapy trainees. *Dissertation Abstracts International*, 45(7-B), 2308.
- Hellman, S. (1999). Supervision of school counsellors in Israel: Setting up a network of supervision. In M. Carroll & E. Holloway (Eds.), *Counselling supervision in context* (pp. 123-139). London: Sage.
- 岩井志保 (2007). わが国における心理臨床家研究の概観 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 54, 135-142.
- 岩壁 茂 (2007). 心理療法・失敗例の臨床研究—その予防と治療関係の立て直し方— 金剛出版
- 上手由香 (2014). 専門性の中に個人的資質が生きること 岡本祐子(編著)プロフェッションの生成と世代継承 (pp.139-163) ナカニシヤ出版
- 金沢吉展 (1998). カウンセラー—専門家としての条件— 誠信書房
- 金沢吉展・岩壁茂 (2006). 心理臨床家の専門家としての発達、および、職業的ストレスへの対処について: 文献研究 明治学院大学心理学部附属研究所紀要, 4, 57-73.
- 川上範夫 (1993). 特集「失敗」から考える—特集にあたって— 心理臨床, 6, 66-67.
- 近藤孝司・長屋佐和子(2016). 関係性の観点から見た、心理臨床家の専門職アイデンティティの発達 心理臨床学研究, 34, 51-62.
- Mateo, N. J. & Reyes, J. A. S. (2015). In pursuit of a Filipino counselor development model: A life-span approach. *International Journal for the Advancement of Counseling*, 37, 262-278.
- 森田美弥子・岩井志保・松井宏樹・直井知恵 (2008). 心理臨床家のアイデンティティと養成教育 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 55, 167-178.
- Moss J. M., Gibson, D. M. & Dollarhide, C. T. (2014). Professional identity development: A grounded theory of transformational tasks of counselor. *Journal of Counseling & Development*, 92, 3-12.
- 元木未知子・安田みどり・久田満 (2014). 臨床心理士の専門職アイデンティティ尺度の開発 臨床心理学, 14, 563-567.

- 村井亮介・岩壁茂・杉岡品子 (2013). 初回面接における訓練セラピストの困難とその対応—継続事例と中断事例の比較検討— 心理臨床学研究, 31, 141-151.
- 中島正雄・富澤和歌子・片岡彩・荒井裕子 (2015). 学生相談に携わるカウンセラーの成長モデル作成の試み—新人期の成長プロセスに注目して— 学生相談研究, 35, 173-185.
- Nelson, K. W. & Jackson, S. A. (2003). Professional counselor identity development: A qualitative study of Hispanic student interns. *Counselor Education & Supervision*, 43, 2-14.
- 岡本かおり (2007). 心理臨床家が抱える困難と職業的発達を促す要因について 心理臨床学研究, 25, 516-527.
- 岡本祐子 (2014). プロフェッションの生成と世代継承 ナカニシヤ出版
- Ronnestad, M. H. & Skovholt, T. M. (2003). The journey of the counselor and therapist: Research findings and perspectives on professional development. *Journal of Career Development*, 30, 5-44.
- 坂本憲治 (2012). 学生相談カウンセラーの職業的発達に関する質的研究—「私の学生相談」を素材として— 学生相談研究, 32, 187-200.
- Sawatzky, D. D., Jevne, R. F. & Clark, G. T. (1994). Becoming empowered: A study of counsellor development. *Canadian Journal of Counselling*, 28, 177-191.
- Schoen, L. G. (1989). In search of a professional identity: Counseling psychology in Australia. *The Counseling Psychologist*, 17, 332-343.
- 下山晴彦 (2002). 心理臨床学における研究について 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, 創刊号, 32-35.
- 新保幸洋 (2000). カウンセラーの熟達化及び成長・発達モデルの構築に関する研究動向 大正大学臨床心理学専攻紀要, 3, 8-23.
- Skovholt, T. M. & Ronnestad, M. H. (1992). *The evolving professional self: Stages and themes in therapist and counselor development*. West Sussex: John Wiley & Sons.
- Stoltenberg, C. D. & Delworth, U. (1987). *Supervising counselors and therapists: A developmental approach*. California: Jossey-Bass.
- 杉村和美 (2001). 関係性の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2年間の変化とその要因 発達心理学研究, 12, 87-98.
- 鈴木潤也 (2013). 初学者セラピストのアイデンティティ形成に関する一考察—ケースの中断の意味に焦点を当てて— 教育人間科学部紀要 (青山学院大学), 4, 95-106.
- 田所摂寿・小嶋明子・松本浩二 (2004). 心理臨床家のキャリア形成に関する研究—若手を対象とした意識調査から— 明治学院大学心理臨床センター研究紀要, 2, 55-74.
- 田所摂寿・松本浩二・小嶋明子 (2005). 心理臨床家のキャリア形成に関する研究Ⅱ—若手を対象とした面接調査から— 明治学院大学心理学部付属研究所紀要, 3, 53-76.
- 鐘幹八郎・山本力・宮下一博 (1984/1995). アイデンティティ研究の展望Ⅰ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1995a). アイデンティティ研究の展望Ⅱ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1995b). アイデンティティ研究の展望Ⅲ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・宮下一博・岡本祐子 (1997). アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカニシヤ出版
- 鐘幹八郎・岡本祐子・宮下一博 (2002). アイデンティティ研究の展望Ⅵ ナカニシヤ出版
- 富樫公一・寺田葉子 (2001). クライエントの成長とセラピストの成長—転移と逆転移が相互に作用する領域でのクライエント理解— 心理臨床学研究, 19, 388-399.
- 上村恭子・小海富美代・井出尚子・箕浦亜子・高下梓・田淵尚子・須佐祐子 (2013). 心理臨床家の専門家としての発達に関する研究 (1)—日本語版スーパーヴァイザー職業的発達尺度 (Supervisee Levels Questionnaire) 作成の試み— 多摩心理臨床学研究: 明星大学心理相談センター研究所紀要, 7, 7-15.
- 割澤靖子 (2016). 臨床心理士指定大学院における学生の学習プロセスの個人差に関する研究 教育心理学研究, 64, 41-58.
- 吉沢伸一 (2007). 心理臨床家のアイデンティティ発達における初期経験の意義—歩み直しの作業と内的地図の創造— 青山学院大学心理臨床研究, 7, 53-63.